理系のキャリアを考える　理系ナビ特別インタビュー

早めに社会と接点を持つことで、自分の動機や能力を見出すべき

株式会社MyNewsJapan 代表取締役
渡邉 正裕

急速に進むグローバル化、それに伴う労働環境の激変――これから社会に出る学生はどのような心構え、準備をするべきなのか。このたび理系ナビでは、キャリア系書籍としては異例のヒットとなっている『10年後に食える仕事 食えない仕事』（東洋経済新報社）の著者であり、独立系ニュースサイトMyNewsJapanのオーナー兼編集長である渡邉正裕氏に理系学生のキャリアについて聞いた。

――渡邉様は著書『10年後に食える仕事 食えない仕事』で〝グローバル化によって日本における72％の仕事は価値を失う〟と警鐘を鳴らしました。今、労働市場においてどのような変化が起きているのでしょうか

グローバル化とIT化が急速に進むことで、日本の労働市場は転換期を迎えています。すでに企業は生産拠点の海外移転を進めており、新卒採用でも外国人留学生の採用を強化するなど、かつての常識は通用しなくなっている。メーカーやIT業界などで仕事を人件費の安い海外に委託する流れは、今後様々な分野でさらに加速していくでしょう。なんとなく就職活動をして、与えられた目の前の仕事を漫然とこなすだけでは、いずれ給与は新興国並みの水準まで下がるか、仕事自体がなくなってしまうというリスクが高まっています。

企業は生き残りのため必死になっており、採用基準は年々厳しくなっています。かつては学生時代に目立った実績がなくてもポテンシャルで採用していましたが、今は学生の実績や成果をシビアに見ている。学生時代から目的意識を持ってゼミを選んだり、学外の活動に取り組んだりすることが求められてきており、早期からキャリアについて考える重要性が高まっているといえるでしょう。

――これから社会に出る理系学生はどんなことを意識すればいいのでしょうか

まず何をやりたいか、動機を明確にした方がいい。メーカーに行きたいのであれば、基礎研究がしたいのか、製品開発なのか、製品は何を作りたいのか。自分のやりたいことを明確にした上で、特化したキャリアの道筋を描く必要があります。

そして企業を選ぶ際には、その会社で本当にやりたいことはできるのか、自分の望む働き方ができるのか、企業の看板にとらわれずにしっかり調べるべき。そして、やりたいことができるのなら新興国の成長企業に飛び込んでもいいし、それから日本企業に転職してもいい。若い人はそんなチャレンジ精神やしたたかさがもっとあってもいいと思います。

自分のやりたい分野を見つけたら、その中から成長している会社を選ぶことをお勧めします。もっといえば参入障壁が高く、新興国企業にすぐ真似されない領域を持っている企業。例えば、東レの炭素繊維やオリンパスの内視鏡などは人にノウハウが蓄積されているアナログな分野で、参入障壁はきわめて高い。そういった領域に行かないと人材としての市場価値が高まらないということを知るべきです。

半導体などデジタルな分野は新興国が参入してきて激しい価格競争に巻き込まれてしまう。入社する企業の経営分析を軽んじると企業と共倒れになってしまうので、自分の動機を明確にした上で、将

来性のある道をしっかり見極めることが重要です。

――企業や経済について理解することが以前よりも重要になっていると

理系学生で危険なのは、研究ばかりしていて社会や経済への関心が薄い人。一昔前なら、目の前の研究をひたすら頑張っていれば、就職してそれなりに出世できたが今はそんな時代ではない。生き残っていくためには、社会や経済の仕組みを理解し、経営やマーケティングなどの知識を習得することが鍵となっている。

とはいえ、学生が社会や経済の仕組みを理解するのは簡単ではなく、私も学生時代は新聞を読んでも良くわかりませんでした。世の中には様々な情報があふれているが、働いてみないとわからないことも多い。それならインターンシップに参加し、社会に飛び込んでみるのもいいでしょう。社会との接点を持った上でいろんな本を読んで知識を補完し、就職活動を迎えてください。まっさらな状態で就職活動に臨むのは非常に危険です。

もう一つアドバイスをするなら、自分に「どんな仕事が向いているのか」「どんな才能がありそうか」を早いうちにおぼろげながらでも見極めること。そのためには、学生時代のうちに社会に出て、話を聞き、自分の力を試すこと。海外放浪、NPO活動、インターンシップなど何でもいいので、とにかく行動を起こして社会に飛び込んでみないことには何も始まらない。少しでも興味を持ったことがあるならとにかく挑戦し、自分の動機と能力を見出してほしい。

――グローバル化が進む経済下で意識すべきことは

グローバル化に対応できる人材へのニーズは益々高まっています。企業が帰国子女を高く評価しているのはグローバルの素地を持っているから。彼・彼女らには環境というアドバンテージがあるが、自分にそれがなければ留学して作ればいい。留学で生じるコストとブランクは後々10倍くらいになって還ってくる。20代のうちの1～2年は振り返ってみれば遠回りでもなんでもないし、企業としては付加価値さえあれば評価に値するので積極的にやった方がいい。教育投資ほど効率のいい投資はないので、戦略的投資は積極的にすべきです。

――キャリアを考える上で中長期的に意識すべきことは

私自身の話をすると、新聞記者として培った取材・記事執筆スキルと、コンサル時代の分析・思考力を掛け合わせることによって希少性と付加価値が高まったと考えています。専門性を活かした仕事をしたい場合でも、自分の専門分野に掛け合わせられるスキルがあった方が希少価値・付加価値は高まる。例えば、技術×MBAやマーケティングなど、自分の軸に何を掛け合わせたら付加価値が高まるかを常に意識すべき。

理系学生はすでに一つ専門性を持っているという点で文系より有利といえます。理系から文系領域に進出するのはそれほど難しくないが、その逆は難しい。掛け合わせるのは業界や言葉、国でもいい。〝この国のことならまかせろ〟といった域にまでなれば、企業から見て魅力的な人材となるはずです。

一つの武器だけで戦って生き残れるのは、よほど才能がある人です。多くの人にとっては厳しい道だし、その領域自体が縮小するリスクもある。武器が二つあれば足し算ではなく、乗算になります。学生時代はそんなことを考えながら、社会人や先輩に仮説を投げかけ、自分なりの答えを就職活動が始まる前に見つけてください。

渡邉 正裕（わたなべ・まさひろ）

株式会社MyNewsJapan代表取締役、編集長、ジャーナリスト。慶應義塾大学総合政策学部卒業後、日本経済新聞社、日本IBMのコンサルタントを経て現職。
『若者はなぜ「会社選び」に失敗するのか』（東洋経済新報社）、『35歳までに読むキャリア（しごとえらび）の教科書』（筑摩書房）など雇用・労働関連の著書多数。

独立系ニュースサイトMyNewsJapan
http://www.mynewsjapan.com

●著書紹介

『10年後に食える仕事 食えない仕事』
（東洋経済新報社）